

中高生を対象とした月経パスポート導入案

- 教育機関における生理休暇制度の実現に向けて -

川口ゼミ 1 班

○進藤 絢世 (Ayase SHINDO)・黄 因梓 (Yinzi HUANG)・棚原 ひびき (Hibiki TANAHARA)

(同志社大学政策学部政策学科)

キーワード：生理、意識改革、学生の権利

1. 問題意識

生理は病気ではないが、女性の心と体を苦しめる。社会に出ると生理休暇は労働基準法で定められた権利であるが、生徒や学生にはその権利が存在しない。私たちは女子高校生 385 人に生理に対する意識や悩み、学生の生理休暇についてどう思うかアンケート調査を実施した。「生理痛などの症状があるが無理をして学校に行ったことがある」生徒は 89.5%だった。私たちは、生理が原因だと辛くても学校を休むことができないというこの現状に問題意識を置いた。

2. 現状分析

私たちが女子高校生に実施したアンケートでは、生理痛などの症状がひどくても学校に行く理由として、「中申点が気になった」が 55.9%、「生理が原因では学校を休めないと思っていた」が 46.6%であった。そこで、私たちは教育機関でも生理休暇制度を導入することを考えた。生理休暇を利用することで、欠席扱いにはせず、課題やオンライン授業等の代替措置を与えるといった内容である。

女子中高生への生理休暇制度導入についてのアンケートでは、95.1%が賛成と答えた。賛成の理由は、「我慢をする必要はない」が 70.8%、「体調が悪化するのを防ぐため」が 60.1%であった。一方、反対の理由として、「女性の中でも個人差がある」「本当に生理のための休みなのか確認が困難」という意見もあった。教育機関での生理休暇制度導入には、本当に生理痛などの症状により休んでいるのか確認が困難であるという課題が上げられる。また、社会的な生理への考え方も大きな課題だと考える。近年、生理の話題について取り上げられることも多くなったが、まだ生理について人と話すことは男女問わず抵抗がある人がいる。日本財団 (2022) の 17 歳から 19 歳を対象に行った調査では、生理について男性の友人・知人・家族・親族と話すことに抵抗があると回答した女性は半数以上であった。また、生理に関連する身体的・精神的な不調や負担、日常の不便で最も多かったのは、指導的立場にある大人に対して生理による不調などを伝えられなかったことであった。このことから、生徒が教員に自身の生理による不調を直接

伝えることは困難であり、生理休暇導入に向けては大きな課題となると考える。そこで私たちは、生理による休暇であることの信憑性を高め、生徒が教員に説明する精神的負担を減少させる役割をもつ「月経パスポート」の導入を提案する。

3. 政策提言

「月経パスポート」、通称「ツキパス」は、生理による身体的・精神的な症状がひどく、学校を休まざるを得ないことを証明するためのものであり、これを提示することで生理休暇の対象とすることができる。

3-1. ツキパスの概要

ツキパスについて詳しく述べる。

最初にツキパスの基本情報を説明する。ツキパスに記載する項目としては、医療機関の診断書、受診履歴、教師との連絡ページなどである。また、ユースクリニックにて専門家の方にお話をお聞きしたことを参考にし、生理の状態は変化することから、3 ヶ月～半年の有効期限を設ける。なお、受診に関しては、京都市による公費負担とする。

次に導入する目的についてであるが、中学生以上の生理経験者が全員所持することで、生理をより当たり前なものにすることである。

そしてツキパスの機能について述べる。ツキパスの機能は、大きく分けて 2 つある。1 つ目は、救済 (代替) 措置を受けるための証明書、いわゆる診断書の役割を果たすものである。後ほど使用手順で詳しく述べるが、ツキパスの使用には医療機関の診断結果を記入してもらう必要があるため、より公的な証明書となる。2 つ目は、生理の程度や状態の変化を可視化することができる。上記でも述べたように、ツキパスには有効期限があり、3 ヶ月～半年を目安に改めて医療機関で定期検診を受ける必要がある。受診するごとに自分の生理の程度や状態を知ることができ、どのように変化してきているのかななどを、目で見て振り返ることができる。

最後に、ツキパスを導入することで考えられる大きな 3 つの効果について述べる。1 つ目は、「ツキパス」という通称を用いることで、より親しみ

やすく扱いやすいものになることである。本政策の目的として、生理をより当たり前なものすることを挙げており、「生理」に関することを口にしやすい、パスポートを目にすることが普通になる環境づくりに繋がると考えている。2 つ目は、医療機関の公的な診断によるものであるため、教員等の理解を得られやすいことである。3 つ目は、思春期・青年期女性の産婦人科受診率の増加に繋がることである。この世代の月経困難症患者の産婦人科受診率は約 4.1%である(外, 葛西 2020)。また初診で重症の患者が多いことなどから、現在の社会では産婦人科受診率の低さが問題であることが分かる。こうした定期的に産婦人科を受診する機会を設けることで、より生理について相談したり、知識を得たりする場を提供できるのではないかと考える。

3-2. ツキパスの使用手順

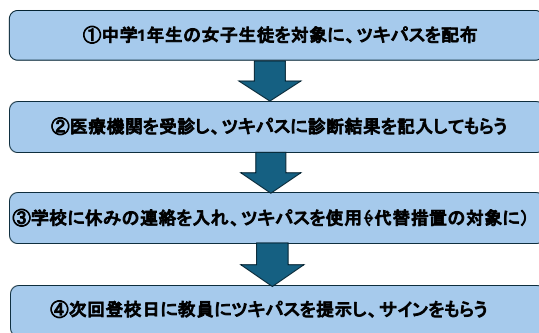


図 1. 月経パスポート (ツキパス) の使用手順

まずは、ツキパス配布から使用までの流れを説明する。

①中学 1 年生の女子生徒を対象に、パスポートを配布する。②医療機関を受診し、パスポートに診断結果を記入してもらう (パスポートには、生理の症状や月経困難症のレベルなど、そして医師の署名を記入)。③生理を理由に学校を休む際は、学校に休みの連絡を入れるとともにパスポートを使用することを伝える (これで救済措置の対応を行う)。④次回登校日に担任教員にパスポートを提示し、サインをもらう。

この手順に沿って手続きをした場合のみ生理休暇として扱い、欠席した場合でも代替措置を与え成績に影響がないようにする。また、月経パスポートを所持しているだけでは使用することができず、医療機関を診断し、有効期限内の診断書を持つ生徒のみが使用することができるものとする。

3-3. ツキパス診療支援制度

月経痛や月経不順は多くの女性が抱える症状であり、身体的にも精神的にも苦痛を伴う場合が多い。これらの症状の中には、子宮内膜症や子宮筋腫といった病気が原因で引き起こされるケース

も少なくない。そのため、早期に適切な治療を受けることが重要であり、私たちの「月経パスポート」制度は、生理に悩む女子生徒が早期に医療機関を受診し、治療を開始するよう促すことも目的の一つである。

しかし、多くの女子生徒は産婦人科の受診に対して恐怖心や抵抗感を抱き、医療機関の受診を躊躇してしまう。産婦人科に対する誤解や偏見だけではなく、生理に関する知識の欠乏や症状の軽視なども適時の受診の足枷になる。そのため、私たちは「ツキパス」を所持する女子生徒に対し、産婦人科での初回受診時の費用 (薬代を除く) を京都市の全額公費負担にすることを前提とし、生理を迎えた女子生徒全員に受診を推奨する制度を提案したい。

具体的には、まず女子生徒が医療機関で受診する際にツキパスを提示する。医療機関側は、ツキパスの情報を確認し、専用のシステムに生徒の受診記録を入力する。それを基に初回受診時の費用は会計から免除され、生徒は自己負担なく診察を受けられる。次に、医療機関は月ごとに初めて受診したツキパス所持者の人数と、診療にかかった金額の合計を自治体に報告する。この報告を基に、自治体は医療機関の財務に影響が出ないように、医療機関に対して受診料を支払う。

このように、費用面の負担が軽減され、それがモチベーションの向上、生理に関わる疾患の早期発見と介入につながる。また、医師がツキパスに署名し、診断内容を記載することで、適切な診察を受けたことを証明する役割を果たすことができる。さらに、生理に関連する健康トラブルを未然に防ぐことも期待できる。

今後、ツキパスが活用されることで、生徒の生理に関する悩みを解消し、社会的な生理に対する意識の改革に繋げていきたい。

参考文献

桑名佳代子 (2020) 「思春期・青年期女性の婦人科受診に至る判断と行動のプロセス」科学研究費助成事業 研究成果報告書

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-16K12098/16K12098seika.pdf> (2024 年 10 月 15 日閲覧)

外千夏, 葛西敦子 (2020) 「月経痛による婦人科受診に対する女子高校生と母親の意識」学校保健研究

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpnjschhealth/62/5/62_314/_pdf

日本財団 (2022) 「生理意識調査」https://www.nippon-foundation.or.jp/wpcontent/uploads/2022/02/new_pr_20220204_01.pdf (2024 年 10 月 17 日閲覧)